博物館藏版

# 教草 第十八 蒔繪一覽

凡そ日用に供する衣食の如き人皆之を衣とし之を食して何たるを知らさるところなき其物品を改正良善にするの術に暗く従て新規の發明なく國産を繁殖せしめて各其業に就く事を知らす故に父兄たる者其子弟をして幼時より各業の大畧を知らしむるときは他日脩産の基となるべし嚮に明治六年澳國博覧會出品の際に乗し各種職業の教草を編成せしめ画圖を加へ以て童蒙に便せり然に舊版第一より第廿四まて昨八年七月の火災に罹りしにより今之を再刻し兼て従前の謬誤を正し遺漏を補へしむと雖ぬ其圖の舊版を再刻する者の如きは鮮明ならさるあり看者之を恕せよ且我國産の多き此一部の盡す所に非す此餘の如きは以て他日に譲る

明治九年二月　田中芳男記

第一 稲米 第二 糖製 第三 養蚕 第四 生糸 第五 樟虫
第六 野蚕 第七 葛布 第八 苧麻 第九 草綿 第十 織緯草木
第十一 索麪 第十二 葛粉 第十三 藍 第十四 青花紙 第十五 製茶
第十六 烟草 第十七 漆 第十八 蒔繪 第十九 蠟 第廿 白栁
第廿一 疊表 第廿二 香蕈 第廿三 製紙 第廿四 蜂蜜 第廿五 油
第廿六 臙脂 第廿七 澱粉上 第廿八 澱粉下 第廿九 褐[illegible] 第卅 豆腐

版權所有

# 教草 第十八 蒔繪一覧

蒔繪とハ金粉をもて様々の模様を画きしものゝ名なりいつの頃より傳はりけん其年月を數ふれバ聖武天皇の御宇ころしめも頃まで伊勢物語に青歌を書ると見へ源氏物語にハ刃きゑき昔ござごとく石の上に蒔繪の形しくらそんのあまゆのあるると見へたる其言葉あること推計るゝや既に寛平、延喜の頃ほひに開け初まり世の浮華に從ひて追々精巧に成行たる有様を知るに足るあり其後足利義政の時代に至て蒔繪の上手土岐入道幸阿彌あり豊臣秀吉の頃にハ本阿彌光悦といふ画道に工しきり雅なる様々の風流ある圖を按し塩見政誠諸方光琳山本春正といふ各一種の風を以て繇銃を傳へ其法今に著し是より蒔繪の書様家々に傳來して研究錬熟の巧よりして成立つものなれバ手短かの教へ草にハ尽すべきにあらねどとあるに荒増の手續を述るに其初め何にも蒔繪の模様を工夫して繪圖を按し薄葉へ巨細に画き其紙の裏より地書漆と名付けたる吉野漆と梨子地漆を當分にまぜあわせたるに朱を合せたるものを少し火にあぶりて其乾をおそくしたるを下繪の通り筆意を失ハぬやうに其輪格のみを写し蒔繪を為すべき品物へ押當て紙の表より檜木の薄き篦にて摺り付け紙を取除け見れバ下繪のまゝに顯えたり其上を同し地書漆にて写せし下繪の輪格の内をぬるに至殊に四五月の頃又ハ八九月のあたりハ書く間に乾くゆへに花鳥の類數々あるハ先つ少しづゝ圖をこのさきて粉を蒔くべし毛棒といふ毛の和らかなるものにて篩のけ漆を埋るまでおきて風呂に入れ乾かしたる事一晝夜にして其上を椿炭にて輕く研ぎてむらなきやうにし又其上を上引砥の粉にて磨き其後柔かなる紙にてぬぐふ如此なる事三四遍に及ぶ是迄にて花葉鳥なとも山水なとも人物なとも其形ちのあらましを蒔付たるものなり其後ち毛打と名付けて此上に上繪をなすくべし縁のさし王を付け或ハ葉の蕋を書き鳥ならバ羽毛を書き山水人物尽く其品によりて上繪を書きたる粉を蒔き能く篩掛て漆に馴ませ乾きて後に吉野漆を摺り上引砥の粉にて磨くなり間に上等の品に心を用ひたるものハ百日紅の炭粉及び角粉を指の腹に付け磨くあり果して光澤の出たるものありて其光澤あるもんを木綿の切れにて能くぬぐふ是なく平蒔繪一ト通りなり且つ童蒙の為に的實に其順序を知らしめん事を欲して先づ圖の如く額面上に蒔繪を施すに最初漆にて裏書したる紙を板より離し取れハ第一圖に示したる模様なり此後も朱を交へたる地書漆にて花の影葉の日向に心を用ひ能く其輪格の裡を村なくぬり粉金を毛棒にて蒔うけ暁と篩ひ乾かせ事二圖に出す粉色の如くなり三圖の如くに摺り漆にて摺りてハぬぐひ拭ひてハ摺り漆を十分に摺り込みて全く拭ひ上る時ハ其色さてしやうとうる色を含むなり四圖に出せる花の蕋より葉の筋の筆意を細やかに書かけて其漆の乾かぬ隙に再ひ粉を振掛け毛棒にて漆を埋め乾きて後に炭にて研き紙にて拭ひ砥粉にて光りを出す時ハ五圖の菊花初より仕上まで摺上等の蒔繪ニ至りてハ葉筋を劃書するもの至又高割が錆上げ漆あけの仕方もあり好ミに任かす此上ニ至るまで梨子地金貝青貝等の類ひあり其一段ハ次ニ記せ

高蒔繪ニ漆上げ錆あげの二様あり先づ錆上げハ第一圖の如く輪格の上を今一度同し漆にて筋書をなし乾きて後せしめ漆ニ常の砥の粉を雑へたるものにて肉をむつくりと上けたるを乾かして其次厚朴炭又ハ木賊にて高低を直し其上吉野漆にて摺り又其上を高蒔漆と名付て一椀の呂色漆を等分に分け其一分を陶盞に入れ火ニ煮る事およそし其後外の煮ざる漆の一分と能く雑ぜ合せしものにて左の地錆の上をぬり能く乾かし原朴炭にて乾き研ぎ其上地書漆をぬり粉金を毛棒にて蒔付け乾きて吉野漆にて摺り乾も此跡の仕上ハ前法に同し

漆上げハ下蒔漆と名付て吉野漆に瀬〆漆を加へそれに紅がらを合せたるものを以て下繪の上をぬり厚朴灰粉を毛棒にて篩のけ漆を埋めたるを蒸室に乾す又よりのあけたるを下蒔と名つけ其上を吉野漆に樟腦を雑へたるものにて摺り其地の高低を厚朴炭にて研き此上に再ひ高蒔漆をかけ乾き厚朴炭にて研き其上地書漆をうけ粉金を蒔く事前法に同し尤上等の物ほど右の手順を幾回となく繰り返すものなり

蒔繪に用ゆる漆の各種ハいづれも雑分なき清浄な吉野紙にて幾回も濾して用ゆ右の地書漆と名付るハ漆の内ニ朱を雑ぜ合せたる跡濾すものあり

青貝ハ厚きハ地錆より先へ付け薄きハ跡ニて付るもの貝の上を一面ニ漆ぬりてめり込砥石にて磨き出すなり

金貝ハ下地の繪を錆上げにて花まるの蕋を粘漆にて其上に金銀の金貝を截にて張付け猶小刀の先にて繪の外にあきりうるを截り取るまで夫より金貝の縁を漆にて引き粉を蒔くなり一切金ハ金貝のこまかなるものより草花岩山の類に並へて付る

地蒔ハ粉金にあらき物細かき物あり品によりて下を繪漆にてぬり梨子粉を竹の管に入れて思の侭にふるあり總て金粉を蒔掛るハ粉のあらきこまかさ次第によりて此竹管の網目の大小を用ゆるゝの外に金平目銀平目といふ最上の地蒔あるあり平目金銀を一枚つゝ筆の先にて又ハ金貝篦のさきをもて津液にて付け地漆の上にならべ付るものあり

金粉の類ハ品々あり其品柄に從て用ゆ

薄朱粉　上々粉　焼金極微塵　焼金微塵
焼金花子　焼金微塵常　焼金常　青粉
小判極微塵　小判微塵　小判花子　小判微塵常　小判常　錫粉　赤銅粉　銀粉
銀極微塵　銀微塵　銀花子　銀微塵常
銀常　焼金梨地小三　同常三　同大三
金銀平目小三　同常三　同大三

金貝ハ金銀青共ニ有之

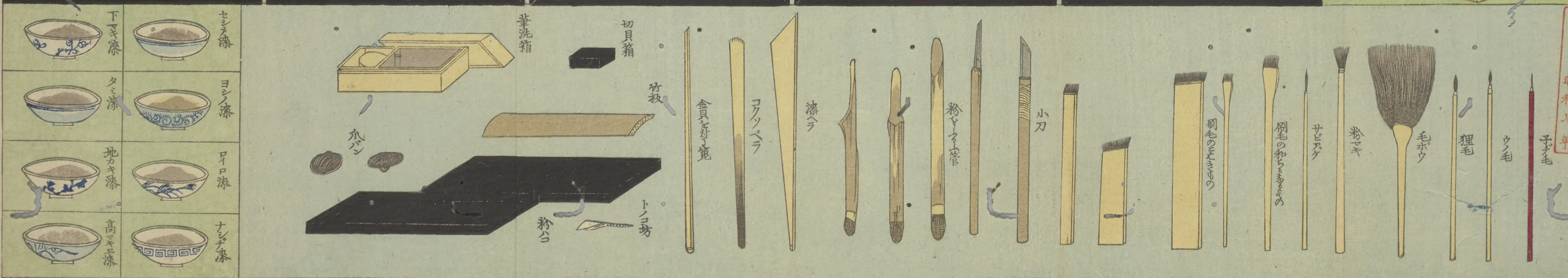
螺蛔ハ青貝紅貝琉球貝あり

蒔画ニ用ゆる器械品々多端なれども缺ざるものゝあり其一ト通りを圖に出せ

蒔繪ニ用ゆる漆の類圖ニ出せ

明治五年壬申晩冬　加藤景孝　識
狩野良信　画
明治九年二月　石田為武　校正

博物局




男爵田中芳男氏寄贈 昭和七年
B 65992